

国際機関における地方創生をめぐる議論
OECD（経済協力開発機構）地域開発政策委員会だより
(PART II)

(2) OECD の歴史

OECD の前身は、第 2 次世界大戦後疲弊した欧州経済の復興のため、当時米国の国務長官であったジョージ・マーシャル将軍が提唱した、いわゆる「マーシャルプラン」の受け入れ組織として 1948 年に発足した「欧州経済協力機構 (OEEC)」である。1950 年代西欧諸国は着実な経済復興を遂げ、OEEC もその所期の目的を達成したことから、1961 年これを発展的に解消・改組し、米国とカナダを加えた大西洋をまたぐ経済協力のための新たな機構として OECD が発足した。

OECD はその発足の経緯から、先進工業国のクラブという性格を持っており、資本主義経済の発展に伴い加盟国も次第に増加し取り扱う分野も多岐にわたるようになった。現在では、国際社会経済が多様化するに伴い、環境、エネルギー、農林水産、科学技術、教育、高齢化、年金・健康保険制度、といった経済・社会の広範な分野で積極的な活動を行っている。

OEEC 発足時、パリ・ロスチャイルド家からブローニュの森近くの瀟洒な城館が寄贈されたが、このシャトー・ド・ラ・ミュエットは今も OECD 本部として使用されている。城館の庭園の地下には英仏両語の同時通訳ブースを備えた近代的なカンファレンスセンターが建設されている。



シャトー・ド・ラ・ミュエット (OECD 本部・パリ)